

今を生きる子どもたち

貧困と格差の拡大のなかで

Ⅲ

②

東海地方に住む美波さんは、市内の認可保育園を紹介数年前、20代前半で花ちゃん、され、入園の相談をしまして産みました。父親とはネ。園で使う布おむつも自ツトで知り合い、未婚でし分て用意しました。「花ちゃん。両親の援助が得られず、んをちゃんと育てたいとい出産後、乳児院に預け、生後う思いがにじみ出ていた」6カ月で引き取って一人でと当時の保育士が振り返りま育てることに。役所を通じす。



園庭で遊ぶ園児―埼玉県内の認可保育園（本文とは関係ありません）

笑顔のない子育て

働き詰めで疲弊

職場は駅の近くのドラッグストア。接客の仕事ぶりを会社のカメラが監視しています。時間給で1日10時間働いても、親子2人、ぎりぎりの生活です。保育園のお迎えは毎日のように午後7時を過ぎました。フルタイム労働なのに社会保険に入れてもらえず国民健康保険でしたが、保険料をきちんと納め、子どもの医療費は無料になりました。

美波さんは、保育園での朝の子どもの別れの儀式「握手でバイバイ」ができませんでした。値引きのシールが張られた菓子パンを花ちゃんに持たせて、園の玄関のなかに放り込むように置いていきました。毎日疲れ切っていて、笑って「バイバイ」することができなかつたのです。お母さんの後ろ姿を見て立ち尽くす花ちゃん。保育士たちは心を痛めながら花ちゃんにかかわり続けました。

自分からはなかなかしゃべらない美波さんに、保育士たちは、花ちゃんの園でのようすを伝えながら、少しずつ近づこうとしました。

やがて美波さんは、足を引くきずるようになりました。いつも体調が悪そうにしています。保育士が「どうしたの？仕事は休めない？」と聞くから、「収入がなくなっちゃうから」と答えます。生活保護をすすめると、「自分で窓口に行ったらけれど、働きなさい」といわれてあきらめた」とのことでした。保育士が、「生活と健康を守る会」と連絡をとり、美波さんと一緒に窓口に行ってもらいました。「なんとかしなくてはいけないと思っただけでも、どうしていいかわからなかった」と美波さん。

未来に向かって

保護の受給が決まり、通院ができるようになりました。働く時間も短くできて、お迎

えの時間も早くなりました。花ちゃんを毎日、お風呂に入れることも、「握手でバイバイ」も、ハンドタオルや着替えなどの園の「お支度」も、ようやくできるようになりました。

「友だちのなかで、とんがって、荒れて、突っ張っていた花ちゃんが、友だちとよく遊ぶようになりました」と保育士が笑います。「お母さんの生活が安定してこそ、子どもも安心するんですよ」美波さんは、花ちゃんの実の父親との関係も続いています。

ある日、美波さんが保育士に言いました。

「婚姻届けの証人になってほしい」

この一言に、保育士は「投げやりに生きてきた彼女が未来に向かって歩き始めたのを感じた」といいます。親子3人の新しい生活が始まりました。

（文中仮名。つづく）